

## 平成28年度 高知大学研究顕彰制度授賞式

### 《研究功績者賞、若手教員研究優秀賞、大学院生研究奨励賞》

この研究顕彰制度は、優れた研究を行った者個人を学長が表彰することにより、研究業績者、若手教員及び大学院生の研究意欲の高揚を図り、もって本学における研究の活性化と一層の発展を目指すことを目的としています。

平成28年度は、今後の活躍の発展性が期待される研究者として、研究功績者賞3名、若手教員研究優秀賞3名、大学院生研究奨励賞2名の方々が受賞されました。

■ 授賞式 日 時：平成29年2月1日（水）11：00 ～11：30

場 所：学長室

■ 受賞者

#### 《研究功績者賞》

<sup>ダレン リングリー</sup>  
Darren Lingley 52歳（人文社会科学部門 教授）

ダレン・リングリー氏は、英語ネイティブ・スピーカーの中核教員として、本学の専門教育ならびに共通教育に重要な役割を果たすとともに、異文化間コミュニケーションや比較文化、英語教授法の理論的・実践的研究を行ってきた。

また、小学校外国語教育における日本のEFL（English as a Foreign Language：外国語としての英語）とオーストラリアのJFL（Japanese as a Foreign Language：外国語としての日本語）比較研究等の科研費プロジェクトで研究代表者をつとめ、学会でも全国語学教育学会・東四国支部会長等の重責を担うなど英語教育面で中心的な存在となっている。

さらに、学術を広めて教育貢献をした TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages：第2言語または他の言語として英語を教える）教員として、2016年4月7日に TESOL 国際大会において、TESOL ヴァージニア・フレンチ・アレン賞を受賞するなど、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

<sup>シミズ タカヒロ</sup>  
清水 孝洋 38歳（基礎医学部門 准教授）

清水氏は、ストレスに対する生体反応（ストレス反応）の制御機構を、特にストレスを受容する脳に着目して研究を行ってきた。これまでに、ストレス反応の1つである交感神経-副腎髄質系（SA系）の脳内賦活制御機構を、ストレス反応に関する神経伝達物質との関連研究で、筆頭または責任著者として20報近い英文原著論文を発表している。

また、SA系賦活を誘発するストレス関連性神経ペプチドのボンベシンが脳内で頻尿誘発に関与することを明らかにし、排尿研究の世界的権威 DIOKNO-LAPIDES ESSAY CONTEST において、2016年最優秀賞（Grand Prize）を受賞するなど、研究者として当該分野における評価を確立してきたことを示しており、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

<sup>フクハラ ヒデオ</sup>  
福原 秀雄 39歳（臨床医学部門 助教）

福原氏は、光力学技術を用いた泌尿器科癌に対する診断や治療の開発に取り組み、臨床研究だけでなく、基礎研究も行ってきた。また、2004年に膀胱癌に対する光力学診断（Photodynamic

Diagnosis：PDD）を臨床導入し、膀胱癌に対してPDDを術中補助診断として用いる事で、術後の膀胱内再発を低下させることを立証するなど、PDDの臨床研究に取り組み、平成22年4月に第97回日本泌尿器科学学会総会で総会賞、平成24年2月に27th Annual Congress of European Association of Urology(EAU) Best Poster Award、平成24年11月に平成24年度 西日本泌尿器科学会賞（重松賞）、平

成 24 年 11 月に第 26 回日本泌尿器内視鏡学会総会ヤングエンドウロジストアワードを受賞している。

さらに、根治的前立腺全摘術における術中 PDD の有用性を立証し、平成 28 年 11 月に第 7 回日本泌尿器内視鏡学会 学会賞を受賞するなど、研究活動が国内外で高く評価されており、研究功績者賞にふさわしいと委員一同が合意した。

### 《若手教員研究優秀賞》

<sup>ナニバ</sup> <sup>タクシ</sup>  
難波 卓司 34 歳（複合領域科学部門 准教授）

難波氏は、分子生物学、薬理学の分野で研究を行っており、特に癌抑制遺伝子、又は癌原遺伝子が小胞体の機能を制御している可能性を考えてスクリーニングを行った結果、癌抑制遺伝子 p53 が小胞体の機能を制御していることを発見し、そのメカニズムを突き止めた。さらには、独自の研究結果をもとに抗癌剤のターゲットを新たに発見し、低分子化合物を用いて小胞体の機能亢進を抑制することで p53 変異癌細胞特異的に癌細胞を殺すことに成功している。その成果は、掲載雑誌ではその号唯一の **priority research paper** として掲載され、高知新聞や web サイトの **Global Medical Discovery** などのメディアに取り上げられ注目を集めている。

また、海洋生物からの有用化合物の研究についても膵臓癌に対して抗癌作用を持つ化合物が発見され、その研究成果があがっている。

今後、海洋コア研究所、農学部、医学部を巻き込んだ共同研究は高知大学の特色を生かしたオリジナリティーの高い海洋と生命科学を融合した研究活動が期待される。

<sup>ウダ</sup> <sup>ユウジ</sup>  
宇田 幸司 39 歳（理学部門 講師）

宇田氏は、比較生化学的見地から酵素の構造と機能進化を探る研究を行ってきており、特に、ATP の細胞内濃度を調節するフォスファゲンキナーゼファミリー酵素に関する研究は多岐に及び、真正細菌から哺乳類までの数十の生物種からフォスファゲンキナーゼ遺伝子を単離し、その分布と基質認識機構の多様化について網羅的な研究を行っている。なかでも、フォスファゲンキナーゼの一種であるアルギニンキナーゼの動物界における分布と進化についての網羅的では、多くの研究者から高い評価を得ている。また、D-アミノ酸の合成酵素アミノ酸ラセマーゼに関する研究成果が評価され、2014 年 **The 2nd International Conference of D-Amino Acid Research** においてベストポスター賞を受賞し、2016 年には、日本 D-アミノ酸学会奨励賞を受賞。さらに、地域貢献に関連した研究として高知県の特産品である宝石サンゴの分子系統解析に研究成果を上げている。

加えて、45 本の査読付き原著論文（うち筆頭著書 16 本）、2 本の和文総説（うち単著 1 本）を発表するなど活発な研究活動を行っていることが高く評価され、今後の研究活動が期待される。

<sup>ハシダ</sup> <sup>ユミコ</sup>  
橋田 裕美子 31 歳（基礎医学部門 助教）

橋田氏は、感染症学の研究を行ってきており、特に皮膚微生物叢（皮膚フローラ）に着眼し、ポリオーマウイルスがヒト皮膚のウイルス叢を組成することを証明し、そのウイルス量が加齢とともに増加することを突き止めたことが高く評価され、感染症医学雑誌 **Journal of Infectious Diseases** に掲載された。また、科学研究費補助金「若手研究（B）」、日本科学協会「笹川科学研究助成」及び公益財団法人「中富健康科学振興財団研究助成」等積極的に外部資金獲得に取り組んでいる。さらに、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」四国 5 大学連携女性研究者活躍推進シンポジウム 2016（中国四国男女共同参画シンポジウム）に高知大学代表として参加し、研究成果を発表した。

加えて、英語論文 15 本（うち筆頭者 10 本）を発表するなど研究活動を行っていることが高く評価され、今後の研究活動が期待される。

## 《大学院生研究奨励賞》

フルキ タカヒロ  
古木 隆寛 24 歳（教育学専攻 修士課程 2 年）

古木氏は、学術研究船（白鳳丸）の乗船研究者に参加する等、海洋生物学・動物生理学の理論的・実践的研究を行っており、特に外洋棲ウミアメンボ類を対象に温度や溶存酸素量などの物理的要因及び他の生物量などの生物学的要因との関係について研究を進めている。

その研究成果について、英文査読付き論文 3 本（うち筆頭著者 2 本）、国内学会発表 20 件（うち筆頭 4 件）、報告書 2 件という活発な研究活動を行っていることが高く評価され、今後の研究活動が期待される。

リュウ ナンキ  
劉 南希 24 歳（医科学専攻 修士課程 1 年）

劉氏は、薬理学や生理学の研究手法を用いて、排尿障害に対する治療薬の研究を行っており、特に前立腺肥大症治療薬として発売された  $\alpha 1$  受容体遮断薬であるシロドトシンが求心性神経活動の抑制を介して、頻尿を改善する蓄尿障害改善メカニズムの一端を明らかにした。

また、日本薬理学会の機関誌（Journal of Pharmacological Sciences）に筆頭著者として、原著論文が採択、国際学会（環太平洋禁制学会）に抄録（口、ポスター発表）が採択されるなど活発な研究活動を行っていることが高く評価され、今後の研究活動が期待される。